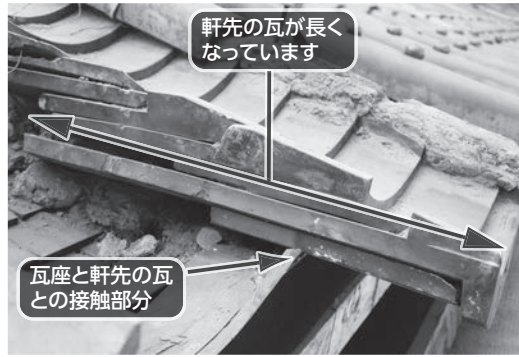




瓦降ろし作業の様子



御影堂門の軒先の構造

よると、「軒先の瓦を長くすることで、瓦を伝って屋根から流れ落ちる雨水が、風などに吹かれて軒下の木材にかかるのを防ぐように

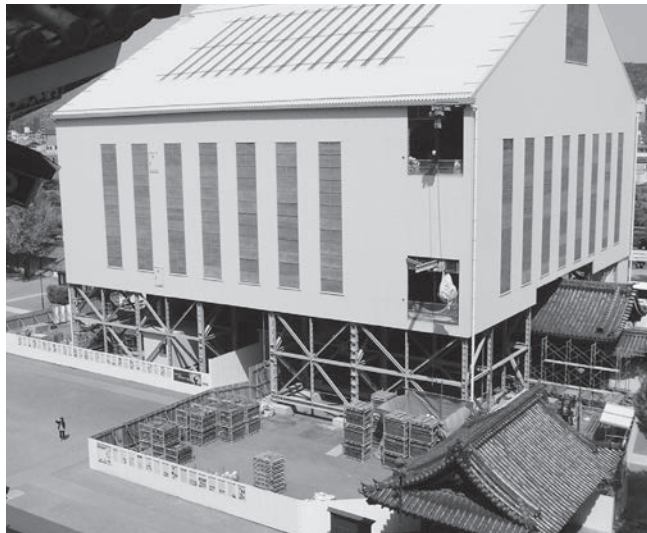


技術専門員の先生方に瓦の状態を確認していただきました

工夫されているのではないかと。ということが考えられるそうです。また、瓦屋根では、下地の軒先面と平行に「瓦座」と呼ばれる細長い波型の木材が打ち付けられており、軒先の瓦は、この「瓦座」の先端部分の非常に狭い面積で支えられていきます。従って、瓦の軒先に出る前面部分のみを長くするとバランスが悪くなるため、前面を長くすると同時に後面の部分も長くしてバランスを保つようになっ

ています。大棟の獅子口瓦については、御影堂は三十個、阿弥陀堂は十五個の瓦が組み合わされていたのに対し、御影堂門は四個の瓦が組み合わされています。ただし、構成する個々の瓦が大きく、最上段を構成する瓦の重さは二百五十八kgもあります。これは、一つの瓦としては、御影堂や阿弥陀堂の瓦も含めた中でも最大級の大きさです。

現在、真宗本廟境内白洲では、御影堂門の瓦降ろし作業に伴い、素屋根の仮囲いの一部が拡張されておりです。ご参拝の方々にはご迷惑をおかけいたしておりますが、御修復工事の完遂のため、何卒ご理解、ご協力くださいますようお願いいたします。



瓦と葺土は、素屋根の開開口部からクレーンで搬出します

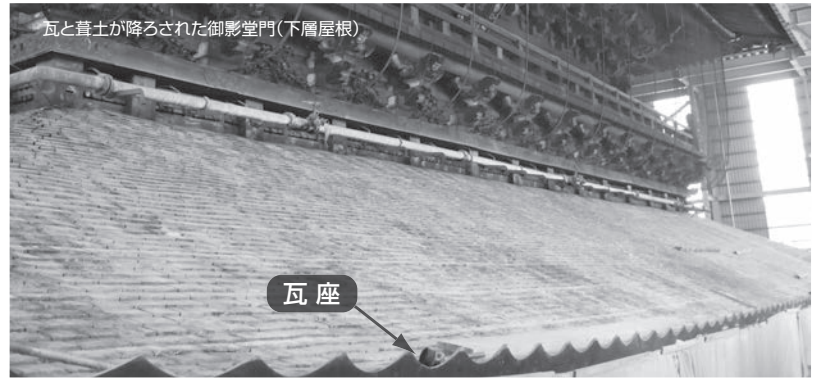


大棟獅子口最上段の瓦は鎖で吊り上げて降ろします



御修復のあゆみ

御影堂門の瓦降ろし作業が進む



瓦と葺土が降ろされた御影堂門(下層屋根)

瓦座

御影堂門では、昨年の九月に素屋根が完成して以降、瓦の損傷具合や柱など木材内部の腐朽具合といった、専門工事に着工するための調査が進められています(本誌二〇一三年一月号掲載)。本年四月から、全ての瓦の損傷状況を調査し、再利用できる瓦とできない瓦を選別するために、約五万五千枚の瓦と葺土を降ろして素屋根の外に搬出する作業が開始されました。

です。この内、寺本甚兵衛と井上三右衛門の先代は、元禄時代の大谷祖廟本堂建立の際にも瓦製作に携わっていました。また、寺本甚兵衛の末裔の寺本光男氏を代表取締役とする(株)寺本甚兵衛製瓦は、御影堂・阿弥陀堂修復に引き続き、今回の御影堂門の屋根改修工事に、(株)山本瓦工業とともに共同企業体を結成し、携わっていただく予定です。



御影堂門の瓦に押されている瓦師3名の名前の刻印

ると評価されています。御影堂門の御修復工事では、できる限りこれらの明治瓦を再利用する予定です。御影堂門の屋根の構造的な特徴としては、軒先の瓦の長さが四十八cmと御影堂や阿弥陀堂の瓦に比べても長く、軒先に出た部分は二十四cmになります。寺本光男氏に